

第十二編 昔日のモンバサ

モンバサは、歴史に関心のある者なら一度は訪ねてみたい所。ケニアの旧首都で、ウガンダ鉄道の出発点であり、首都ナイロビの歴史が精々100年強だとすれば、モンバサは、10世紀を、はるか以前まで遡るようだ。モンバサの旧名Mvitaは、古くから「戦いの島」の意味があるといわれている。その名の通り、モンバサの歴史はそのまま血塗られた戦いの歴史かもしれない。

はじめに

ナイロビとモンバサを陸路で走破するとすれば、7-8時間だそうだ。鉄道では、夕方ナイロビを出発すると次の朝モンバサの駅に至るといふ。しかし、何といても空路だろう。ナイロビ発14:00のケニアエアに乗り込むと、多くのムスリムと思われる人々が席を占めていた。モンバサは、ムスリムの一大勢力が存在しているのだ。45分で飛行機はモンバサのモイ国際空港に着陸した。空港の出口を出ると、私の名前のプラカードをもった大男がいた。ピーターという今回の旅のガイド兼ドライバーだ。車はトヨタカローラで白のオートマティックだ。早速乗り込んで、モンバサの市街に向かった。暑く湿気も高いようだったがさほど気にはならなかった。

モンバサはコースト州に住む9種族（トライブ）のうちギリアマ族の居住地区であり、直径5キロメートル、面積にして25平方キロメートルの島が中心であるが今は外縁に発展し、グレーターモンバサと称しているとのこと。このギリアマ族の言葉でMONBASEY（ワンバセイと聞こえる）というのがある。ここに初めてやってきたムスリム商人たちが、いろいろ現地人に聞いたらしいが、現地人は何を聞かれているのかわからず、英語のWHO ARE YOU?という意味であるMONBASEYを繰り返したらしい。そこから、地名モンバサが生まれたのだという。現地人の言葉がそのまま地名になった例は他にもある。マサイ語で、ナイロビはPURE WATERを意味し、ナクル湖はPLACE OF DUSTを意味し、ナイバシヤ湖はONLY ONE LAKE OF CLEAN WATERを意味するのだそうだ。

さて種族の話をしよう。ケニアのコースト（海岸）州は、北はソマリアの国境から南はタンザニアの国境に接する500キロメートルの細長い海岸である。海岸の地勢は変化に富み、多くの人々を育てている。人々は大きく3つに分かれる。つまりスワヒリ人（ザンジバルと付近の沿岸に住むバンツ人、アラビア語で「沿岸の」の意）、タイタ人、そして、ミジケンダ人である。ミジケンダ人は、更に歴史的にも文化的にも共通性のあるバンツ語を話す9種族に分かれる。すなわちクワレ地区に住む2部族、デイゴ族とデウル

マ族であり、キリフィ地区に住む7部族、ラバイ族、カンベ族、リベ族、ジバナ族、チョンニ族、カウマ族、ギリアマ族である。彼らは結婚も部族間で障害なく奨めており、争いもない。19世紀になって、ミジケンダ人は、人口から来る圧力の為に移動を開始し、今や、後背地と海岸の両地域を手に入れており、北にポコモ人と接し、東にスワヒリ人と接し、西にワアタ人やタイタ人に接し、南にセゲジュー人に接している。この中でミジケンダ人は集団として伝統的な生活習慣を守ることに努力を注いでいる一方で、個々の準種族は、夫々の独自性を発達させている。そのため、ミジケンダ人を一つのグループとするのが難しい事もある。言語的に見るとミジケンダ人は、スワヒリ人やポコモ人と同じバンツ一人のグループとして括ることができるだろう。このバンツ一人は、おそらく中央アフリカからタンザニアのウサンバラ/パレ高地群を横切って進出してきたと思われ、約2000年前にケニアに住み着いたと推定されている。

現在の行政上の区分であるコースト州 (Coast) とは、ラム地区、タナリバー地区、タイタ地区、キリフィ地区、クワレ地区の5地区の総称である。このキリフィ地区にある都市がモンバサ、マリンデイーであり、ラム地区にある都市が、アフロアラビア文化の宝庫とされるラムである。そして、この海岸が面している海こそ世界で一番温度が高いとされるインド洋という事になる。

話しをモンバサに戻すと、有名なヴァスコダガマは、モンバサではなくマリンデイーに停泊したらしい。マリンデイーは当時アラビア人やトルコ人等のムスリム商人たちが独占していたインド貿易の重要な交易港のひとつであった。ポルトガル人であるヴァスコダガマにとって、喜望峰を周ってアフリカの東海岸に到達するだけでも快挙といえるのに、更にマリンデイーから、一人のアラビア人の水先案内人に導かれて、インドの西岸に到達した。1498年の事だが、ヨーロッパ人にとって「インド航路発見」といわれる世界的出来事となったのは、その後のヨーロッパ列強のインド貿易への進出を招いたからだろう。

10世紀以前のオーマン海上商人のルートに乗っていたモンバサ：

モンバサの「イエスの砦」の中に入ると幾つかの博物館がある。その一つに、オーマンのアラブ人の交易ルートについて陳べた「額」が壁に下がっていた。10世紀 (AD) に、ホルムズ海峡近くに位置をしめたオーマンのアラブ人は、進取に富み、極東のエキゾチックな商品をアラブや更に南方に運び繁栄したとあった。彼らをアフリカの海岸に運んだのは季節風 (モンスーン) であった。その「額」には10世紀の交易都市の名前があった。オーマン、エイデン、モガデイッシュオ、マリンデイー、モンバサ、ダルエスサラム、キルワ、モザンビーク、ソファアラ、マダガスカル、そして中国は広東の名前があった。

モンバサは10世紀のオーマンのアラブ商人の伝統的な交易ルートに乗っていたのだ。

ポルトガル支配以前のモンバサ：

モンバサは長い歴史を持っている。シシリーのロジャー2世の宮廷で地理学者のアラビア人であるアル イドリシが、初めてモンバサの名前を陳べたのは1154年の事であった。しかし、東アフリカの海岸にある、この商業都市については2世紀（AD）にまで遡る記録がある。モンバサの最も栄えた時代は恐らく15世紀だったろうと思われる。其の当時モンバサは最大かつ最も洗練された商業都市であっただろう。スパイス、金、象牙、鉄がインドからの綿織物やジュートと、中国やペルシャからの陶器と、そして食糧と取引されていた。タンザニアからは鉄鉱石が採掘され、モンバサは象牙細工を施した短刀の産地として有名であった。

海岸沿いの町はスワヒリ族が支配していたが、その当時、ムスリムはムーア人（MOORS）と呼ばれていた。彼らの町は独立の国として機能していた。町同士の競争は激しく、隣の町に打ち勝とうと常に競っていた。1500年頃のポルトガル人の見聞によると、モンバサの住人は、金糸の衣をまとい、木彫を施した豪勢な多重建築物に住み、堂々たる生活を営んでいたという。残念ながら当時の町並みは残っていない。しかし、モンバサのニャーリブリッジの南で、コースト州立総合病院の拡張のための土台を掘っていた時に、中世風の町の考古学的遺跡が発見されている。そして古いポルトガルの地図には、壁に囲まれたムーア人の町が、現在の総合病院の場所の直ぐ下の湾沿いに存在していた事が示されているという。

ポルトガルの時代（1498年から1697年まで）：

1498年に、ヴァスコ ダ ガマに率いられたポルトガル船団がモンバサに立ち寄ったが住民の敵意が激しい事を知って、そのまま航海を続け、マリンデーに上陸し、そこで基地を造った。しかしポルトガル人は、モンバサを手に入れたかったので、16世紀の間、4回にわたってモンバサを侵略し、略奪し、焼いたとされる。ポルトガル人の狙いは、海岸沿いの商業港の支配権を確立する事だった。1589年に、モンバサは遂に屈服し、ポルトガル人は、その指揮所をマリンデーからモンバサに移した。1593年には、「イエスの砦」（FORT JESUS）の基礎が築かれ、1596年までに砦は概ね築かれた。「イエスの砦」は、最も良く保存されており、この海岸に沿って作られた完璧なポルトガル人の防衛線だった。更に言えば、16世紀の軍事建築物の素晴らしい典型ともいえる。

さて、1589年の進攻は、中世風のモンバサに「死の一撃」を加えた。ポルトガル人が海から攻撃した同じ時に、ジンバと呼ばれる食人の習慣をもった野蛮人の群れが、近くの農村を荒らしていた。ポルトガル人が主だったモンバサの指導者たちを捕らえて引き揚げた後、ジンバがマクパの浅瀬を涉って、モンバサに侵入し、すでに戦う力を失っていたモンバサの市民たちを皆殺しにしたという。だから、ポルトガル以前のモンバサが地上に

殆ど残っていないのは、不思議ではない。明らかに全ての人々が抹殺されたのだから。現在のモンバサの人々は17世紀以降に住み始めた新しい人々の子孫が殆どであろう。

ポルトガル人は、1698年にオーマンのアラブ人にその支配権を譲るまでの100年の間モンバサを掌握し続けた。最後の2年と9ヶ月の掌握の後、「イエスの砦」はついに降参したが、それはインドのゴアからの応援船団が食糧や援兵を積んで到着する1週間前の事だった。ポルトガル人は、「イエスの砦」を取り戻す為のむなしい試みを、何度も繰り返した。1728年にルイス デ メロ サムパイオ將軍の率いる「イエスの砦」奪回が成功したが、その時ポルトガル人には最早アラブ人に対抗するだけの人材もいなければ海岸部の人々の支持もなかった。1729年にはポルトガル人はモザンビークに引き揚げざるをえず、將軍も船もゴアに引き揚げる途中で失われてしまった。

ポルトガル人の占領期間、ゴア人または現地人の兵士を別にすれば、モンバサに住んでいたポルトガル市民は50家族ぐらいたった。この小さなキリスト教集団はラ ラボゼイラまたはフォックスホールと呼ばれた砦に近接する街路に住んでいた。現在のエンダイアクウの辺りである。つまり彼らは砦になるべく近い所に住んで、少しでも町に不穏な空気が走ったりすれば、すぐに「砦」に避難したのだ。彼らの建造した最大の建物といえば、税関事務所、聖アウグステイヌスの大砲の家、教会区教会（この建物は1860年頃まで存在しており牛小屋として使われていたらしい）であった。残念ながら現在痕跡は残っていないので、どこにこれらの建物があったのかを確かめることができない。エンダイアクウの幾つかの建造物は、しっかりしたコーラル（サンゴ礁の岩石）で土台を形成しているし、優に17世紀に遡るものである。ポルトガル人が残した最も永続的な遺産とは、「イエスの砦」とその付帯の防衛塁である。

アラブ人の時代（1697年から1888年）：

ポルトガル人を倒してから、オーマンのアラブ人は地元で根を生やした世襲の総督を通じて東アフリカの海岸部を支配した。このシステムで、モンバサの場合、支配的な家族であるマズルイー族が世襲の総督となったが、マズルイー族には、オーマンから分離する危惧があったし、実際その通りになった。マズルイーは、自治権をもって、1741年から1837年までモンバサに君臨した。1728年から1729年のポルトガルによる短期間のモンバサ回復とは別に、1824年から1826年の「英国の介入と庇護（BRITISH PROTECTION）」という「小幕間の出来事」があった。マズルイーの指導者が英国海軍のパトロール船を招き入れて、オーマン艦隊の急襲からモンバサの市民を守り、独立を維持しようとしたという「出来事」である。其の時、英国のオーウェン大佐の命令で英国国旗が「イエスの砦」にたなびく事になった。オーウェン大佐はマズルイー族の要請でモンバサの援助を引き受けると共に、このモンバサが奴隷貿易を禁止するうえで有力な基地となりうる

との観測をもったといわれている。しかし、この最初の「英国の庇護」の期間は短かったし、政治的な理由から、引き揚げる事になった。英国はインドに至る陸上路の一部を押さえているオーマンのアラブ人を懐柔することのほうが（其の当時はスエズ運河はまだ建設されていない）厄介な海岸部の一都市の運命よりも重要だったのだ。モンバサのマズルイー族は、その後数年その支配を延命する事に成功したが、1837年に、オーマンのアラブ人がモンバサを掌中にし、マズルイー族を放逐した。1856年にオーマンの支配者セイイドサドが亡くなった後、彼の王国であるマスカットとオーマンと東アフリカの領有地は2人の息子に分割された。長男がマスカットとオーマンをとり、次男が東アフリカの帯状の海岸部をとった。次男はその海岸部をザンジバルから統治した。モンバサは、こうして、ザンジバルのスルタンの領土の一部になった。

オーマンのアラブ人もマズルイー族も共に「イエスの砦」を、モンバサを支配するうえでの中枢とし、ポルトガル人の作った湾岸に沿って伸びた壁をそのまま使った。残念ながら、18世紀と19世紀のモンバサを知る縁がないが、この古い壁は20世紀の初頭でも尚見ることが出来たし、その全容は古い図から推理する事が出来る。マズルイー族の長老は、砦に暮らし、その墓もあった。最も古い墓は1715年に遡るし、マズルイー族のメンバーは今でもそこに埋められている。

1837年から1888年のモンバサは「ザンジバル時代」に当たるが、経済的には最も活発な時期でもあった。19世紀の初頭、ザンジバルは、東アフリカの海岸部の商業のセンターとしての立場を確立し、大いに栄え、1837年以降、モンバサは便利な供給港として恩恵を享受した。この時期に、ザンジバルは、中央アフリカから、バガモヨやキルワ キビンジェを通過する奴隷ルートで、連行されてきた人間商品（奴隷）の供給をうける大きな奴隷貿易の「中継基地」として、その悪名を馳せた。モンバサもまた奴隷をザンジバルに供給した。現在「ツサボ東サファリ公園」となっているあたりを通過する隊商ルートがあった。

1850年以降は、インド商人が主としてザンジバルやインド本国からやってきて、住み着いた。オールドタウンの住宅の殆どは、インド商人によって建てられた物だし、ザンジバルやインド本国に建築的に似ているとされる。繁栄するに従って、モンバサは次第に今日の姿を形成し始めた。1850年に町の人口は約1万人であったが、1897年までには2万5千人に膨らんでいる

英国の時代（1888年から1963年）：

一方、英国や欧州列強のスワヒリ海岸部に対する関心は大きくなってきていた。その理由は色々だが、人道主義と宗教であり、商業競争と帝国主義のぶつかり合いであった。英国

公認の商事会社である大英帝国東アフリカ会社（THE IMPERIAL BRITISH EAST AFRICA COMPANY）が1888年に組織され、現在のケニアとなっている地域の統治に責任を負うようになった。この会社の直接の子孫は、マケンジーマリタイムという船の代理店としてモンバサに今も存在している。しかし、1895年に、大英帝国東アフリカ会社の財政的問題は、英国東アフリカ保護領（THE BRITISH EAST AFRICAN PROTECTORATE）の形成、統治権を英国植民地政府（BRITISH COLONIAL GOVERNMENT）に移譲、そして現在ケニアやウガンダといわれている地域を西洋の力で開発しはじめる結果となった。海岸部は、1963年に、ケニアの一部として独立するまで英国植民地政府の支配下に置かれた。そして多くの英国人を始めとする欧州人がモンバサにやってきた。まず布教集団、それから商人、最後に行政官がやってきた。彼らは家を作り、会社や銀行や相談所をオールドタウンに組織し形成した。初代の英国の弁務官、アーサーハーディングは、アラビア人やポルトガル人の例に習って、「イエスの砦」に政庁を開いたが、1900年以降は、英国人の人口の急速な増加とともに、行政府の中枢をトレジュリー広場といわれる広い地域に移し、海岸に沿って政府の住宅を建設した。

20世紀の変化は、モンバサからの偉大な鉄道建設に見る事ができる。鉄道は1899年にはナイロビに達し、1901年にはビクトリア湖畔のキスムに達した。その時代において、この鉄道建設は技術と組織力の粋を集めたものであった。英国人の力と、多数のインド人の労働者を動員して建設された。そのインド人の多くは、アフリカに残る事を選んだ。鉄道建設の結果、モンバサは移民と貨物のアフリカへの玄関口（＝主要港）となった。モンバサは1906年までケニアの首都であったが、行政は新しい都として、ケニアの中心に位置するナイロビを選び、移転した。

モンバサ 1963年以降：

モンバサは、ケニアの首都をナイロビに譲り、またオールドタウンのダウハーバーが、島の西部にあるキリンジニのコンテナ岸壁によって、その往時の地位を追われたとしても、モンバサが東アフリカの主要港である事に変わりはない。モンバサは、今やケニア第2位の都市として、モイ＝アベニューやデイゴ＝ロードに見られる近代的な開発や町作りを進めている。しかも、オールドタウンは、その「昔日のモンバサ」の特徴を色濃く残し、過ぎ去った時代を忍ばせてくれるし、モンバサの変化に富んだ歴史を覗かせてくれる。

参考文献：THE OLD TOWN MOMBASA, A HISTORICAL GUIDE

(Published by the friends of Fort Jesus)

「FORT JESUS 博物館」内展示資料など